



「赤ちゃんの股関節脱臼」について

私は股関節を専門とする整形外科医で、これまでに股関節の手術を3000件以上行つてきました。そのうちの割合は大人の「変形性股関節症」に対する手術ですが、その原因の8割以上が赤ちゃんのときの脚の付け根の関節がはずれる「股関節脱臼」でした。

赤ちゃんの股関節は柔らかく、生まれたときにすでに脱臼していることがあります。抱き方によっては、M字の形（カエルの脚のかつじう）に開いているのが自然な状態ですが、オムツや衣服による締付けやおくるみ、横抱きなど不自然な抱き方では、「脚がまっすぐ伸びた状態」になり、それが脱臼の要因になります。抱き方は、M字の形に脚を開いた状態で赤ちゃんが親の胸にしがみつく格好になる「コアラ抱っこ」がおすすめです。また、寒い季節に生まれた赤ちゃんに脱臼が多いことも指摘されています。おそらく寒い季節に生まれると、厚めの衣服や毛布によって脚を伸ばした状態になるためと思われます。さらに、顔がいつも同じ方向ばかり向いている「向き癖」も、股関節脱臼を誘発することがあります。向き癖があると、赤ちゃんの脚が立て膝をとったり、脚が内側に倒れた姿勢をとったりするため、股関節が徐々に脱臼することがあるからです。

発生要因としては、遺伝的要因・出生前環境要因・出生後環境要因があります。遺伝的要因として、家族内発生が多いことや女児に多いことが知られています。出生前環境要因として、正常分娩より逆子（骨盤位分娩）が約10倍多いと言われています。これは、逆子では子宮内で胎児の膝が伸びていることが多く、股関節や膝が持続的に伸びていると股関節が脱臼しないためです。

出生後の環境要因として、下肢の

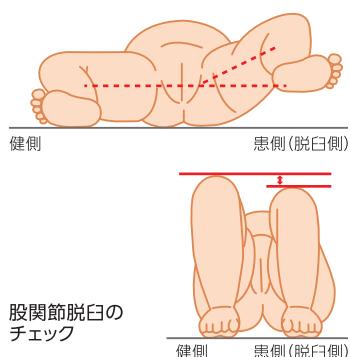
運動を妨げるような着衣やオムツ、抱き方が関係しています。たとえば、赤ちゃんの脚はM字の形（カエルの脚のかつじう）に開いているのが自然な状態ですが、オムツや衣服による締付けやおくるみ、横抱きなど不自然な抱き方では、「脚がまっすぐ伸びた状態」になり、それが脱臼の要因になります。抱き方は、M字の形に脚を開いた状態で赤ちゃんが親の胸にしがみつく格好になる「コアラ抱っこ」がおすすめです。また、寒い季節に生まれた赤ちゃんに脱臼が多いことも指摘されています。おそらく寒い季節に生まれると、厚めの衣服や毛布によって脚を伸ばした状態になるためと思われます。さらに、顔がいつも同じ方向ばかり向いている「向き癖」も、股関節脱臼を誘発することがあります。向き癖があると、赤ちゃんの脚が立て膝をとったり、脚が内側に倒れた姿勢をとったりするため、股関節が徐々に脱臼することがあるからです。

赤ちゃんの股関節脱臼は、早期に見つかれば、装具をつける治療で多くは治ります。ただし装具で治せる時期は、遅くとも生後6ヶ月までですので、いかに早く股関節の異常を発見できるかが重要です。発見が遅れると治療が難しくなり、手術が必要になる場合があります。また股関節の異常が改善しないまま成長すると、「変形性股関節症」という股関節が痛くなつて動きや歩行が悪くなる大人の股関節の病気に発展します。

乳児健診で股関節の異常が疑われた場合や気になる点がある場合は、必ず整形外科を受診しましょう。また、オムツを換えるときに股関節が十分に開くかどうか、仰向けに寝かせて両膝を立ててみたときに膝の高さに違いがないか（下図）をお母さん自身が確認することも大切です。

赤ちゃんの股関節脱臼の発生頻度は1000人に1～3人とまれですが、赤ちゃんの場合、股関節が脱臼していつも決して痛がつたり脚を動かせないことはありませんので、なかなか気付かないものです。そこで、日

本小児整形外科学会では、「赤ちゃんの股関節脱臼」のリスクとして、①向き癖がある ②女の子 ③家族に股関節の悪い人がいる ④逆子で生まれた ⑤寒い地域や時期（1～3月）に生まれたなどをあげています。この5点のうち、複数の項目に当てはまれば、必ず乳児健診で脱臼の有無を確認する必要があります。



今回の先生

大森 整形外科リウマチ科

福井市北四丁目3-14-12
TEL.0776-57-5000
<http://omori-seikai.or.jp>

大森 整形 検索

院長
大森 弘則先生

※診療時間など詳しくはホームページをご覧ください。

大森整形外科リウマチ科